

紀

要

第 12 号

1999. 3

財団法人滋賀県文化財保護協会

# 櫛の造形

## — 弥生時代の飾り櫛 —

中川正人

はじめに

櫛は髪を梳かし整える道具であり、また結い上げられた髪に挿すことで髪飾りとしての役割を果たす。櫛の歴史は縄文時代の早い時期にはじまり、木や竹、骨角などを素材とし漆を塗るなど多彩な造形をつくり出してきた。つづく弥生時代の櫛の出土分布をみた場合、今回まとめるように縄文時代の堅櫛に比べ出土量が少なく、しかも出土する地域が西日本にかたよっているのが現状である。近年の低湿地遺跡の発掘調査が進むなかで、製作技法や意匠に弥生時代の特徴をよく表すものがいくつか出土している。

本稿では、これまでの調査報告例を整理するなかで、縄文時代からの流れをくむとされる弥生時代前期の漆塗り堅櫛から、意匠的にも弥生時代の象徴的な文様を取り入れたものへと変化していった櫛の造形について、素材の加工と製作技術を論点としてまとめる。また、簪は櫛との区別が機能的、形態的に難しい場合があるが、これまでの報告例にならい概観する。さらに、古墳時代の定型的な黒漆塗り堅櫛へと変化していく過程についても若干の考察を加えたい。

### 1. 櫛の造形技法と分類

櫛の造形技法からみた分類法として、結齒式、刻齒式さらに挽齒式がある。結齒式とは縄文時代の堅櫛に多く見られるもので、複数の櫛歯を一定間隔で並べ、横材（横架材）をあて植物繊維などを使って結束し漆で固着させる技法からなる。さらに赤い顔料を漆と混ぜ合わせ塗布することで耐久性と装飾性を高めた。本稿でも取り上げるように、弥生時代中頃の例として、櫛歯材を桜や樺などの樹皮だけで綴じ、結齒式でありながら漆を使わないものもあらわれる。

また、結齒式は単純結齒式と彎曲結齒式に分けることができ、単純結齒式は齒材を平行ないし扇形に配列し結束するのに対し、彎曲結齒式は頭頂部で櫛

歯材を曲げながら左右に振り分けて櫛歯の根もとで結束するもので、古墳時代に一般的な黒漆塗り堅櫛がその代表例である。

刻齒式とは木や骨、角などを板状の素材とし、櫛歯を石器や金属器などの刃物で刻み出すとともに文様の彫刻や彩色による装飾を加えたもので、縄文時代における木質のものは福井県鳥浜貝塚や北海道美々々4遺跡で出土例がある。弥生時代にはこの時代特有の装飾を付加したり、赤色顔料を塗布している例がある。挽齒式の櫛は刻齒式の発展したもので、櫛の材料を鋸やヤスリなど専用の道具で歯を挽いて造り出す。この技法は、古墳時代後期以降に出現し、平安時代に発展する横櫛の典型的な製作法である。

櫛の部分名称について、結齒式堅櫛の場合「ムネ」と「歯」に分けて記述される場合が多いが、本稿では刻齒式の櫛や簪も扱うことから、ムネと呼ばれている部位を頭部と呼称する。

### 2. 弥生時代の櫛に関する研究

弥生時代の櫛についての考古学的研究は、低湿地遺跡の発掘調査として先鞭をつけた奈良県唐古遺跡の報告書にはじまるとされ、同遺跡出土の櫛と古墳時代の黒漆塗り堅櫛との相違点に着目し観察結果を述べている（末永・小林・藤岡1943）。この唐古遺跡や三重県納所遺跡他出土の朱漆塗り堅櫛の比較調査から、これら複数の堅櫛の製作技法に共通点があるとし、櫛の製作地と工人について試論がなされた（工楽1986・1987）。

弥生時代の装身具の形態的な分類や変遷を扱うなかで、出土遺構や出土状態により櫛の使用形態を復元することで当時の生活にしめる櫛の役割りを明らかにし、今後の研究の方向と問題点を提示した（木下1987）。自然科学的な材質調査の観点からは、弥生時代の漆塗り堅櫛の優品として知られるタテチヨウ遺跡出土の櫛について、塗膜構造の観察を主体とした調査が実施され、弥生時代の漆製品の調査例が

少ないなか、漆文化が隆盛だった縄文時代と弥生時代の漆工技術の関連の有無については、今後弥生時代の漆器の調査例が増えることで新たな展開が期待されるとした(永嶋1990)。

近畿地方を主とした出土木器の集成のなかで、服飾具として弥生時代の櫛や簪が集成され、櫛と簪についての基本的な研究テーマがまとめられた(木器集成図録1993)。さらに最近では、弥生時代の出土例を網羅的に収集し、地域と時代別に図表として整理した研究発表資料が提示された(本間1993)。また、石川県野本遺跡出土の堅櫛を端緒に、近世に至るまでの櫛の形態分類案を提示するとともに、櫛の用途と文化的な背景が論じられた(木立1993)。

これまで述べたように、弥生時代の櫛の出土例は量的にはまだ限られたものであるが、形態的に多様な展開をみせている。縄文時代から古墳時代にかけての櫛についての研究成果を再度確認しながら、弥生時代の櫛を時期的に前期、中期、後期の3区分として取り扱い、実見した櫛についてはその造形技法について考察を加える。

### 3. 弥生時代前期の堅櫛

(1) 納所遺跡(図一1) ほぼ完形品での出土で、現状では出土状況がよくわかるように周囲の土ごと切り取り保存処理がなされている。通常は腐朽し残ることのない櫛歯が良好に遺存している。この造形法は、櫛歯20本と横架材を紐で結束するとともに横架材の両端を曲げて櫛歯を扇形に広げている。そのさい横架材、または結束用の紐を持ち上げて頭部上端で結ぶことで透かし飾りとしている。なお、使用している赤色顔料は水銀朱(HgS)と同定されている。

(2) 唐古遺跡(図一2) 前述したように納所遺跡出土の櫛、唐古遺跡出土の櫛、東武庫庄遺跡出土の櫛、さらに玉津田中遺跡出土の櫛の4点が同様の製作技法と推定され、一つの製作地からの供給品の可能性があると考えられた。

(3) 西川津遺跡(図一3~6) この遺跡からは堅櫛が20点以上出土している。いずれも弥生時代前期の地層からの出土とされ、報告書に掲載されている軟X線写真を観察すると造形技法的におおよそ4

種類に分けられる。

櫛歯材を均等間隔に並べ横架材を渡さずに繊維のみで結束しているもの(図一3)。横架材を渡すとともに櫛頭部周辺にも強化のための材をあて繊維で結束するもの(図一4)。櫛歯を並べ3条の横架材の左右を上部に持ち上げて頭部を環状に結びぶとともに、横架材の間隙を利用して透かし飾りとしているもの(図一5)。櫛または簪などへの付加的な装飾物と考えられるもの(図一6)。この断片は、骨材となる内部の櫛歯や横架材、結束材が認められない。報告書では素地を板としているが、軟X線の透過度からみて、漆と植物質の粉末などを混和した刻苧系のもので塑形され朱漆が塗布されたと考えられないだろうか。

他に素材や内部の構造は不詳であるが、結歯式の堅櫛として太田遺跡(図一7)、安満遺跡(図一8)の例も報告されている。これら弥生時代前期の堅櫛の特徴は、ともに漆塗りの結歯式堅櫛で、縄文時代の造形技法を受け継ぐものであることがわかる。

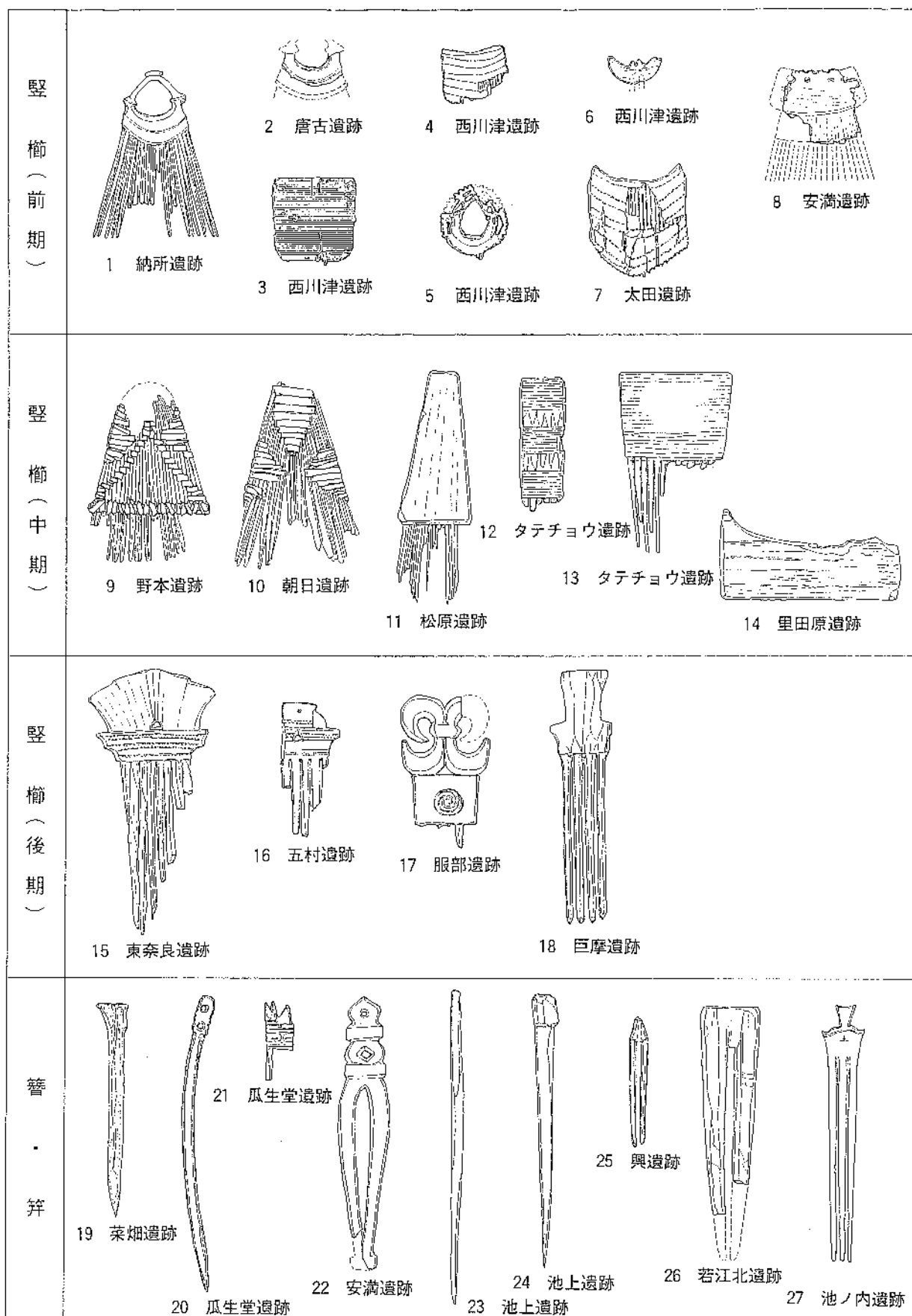
### 4. 弥生時代中期の堅櫛

(1) 野本遺跡(図一9) 木ないし竹を素材として歯を削りだし、頂部から左右に歯を折り曲げ逆U字形の頭部を造り出すとともに、横架材をあて櫛歯の間隔を調整しながら樹皮で結束している。報告書で指摘しているように、歯材の頂部にあたる部分は薄く削り込まれ曲げやすく加工している(木立1993)。なお、櫛歯に使用された樹種は、アジサイ属ユキノシタ科ノリウツギと同定されている。

(2) 朝日遺跡(図一10) 樹皮で結束する手法は、前述の野本遺跡例と類似する。10本の櫛歯を逆U字形に折り曲げて成形されている。なお、報告書の記載では櫛全体に赤色顔料の塗布ないし付着が認められたとしている。

(3) 松原遺跡(図一11) X線写真の観察結果から、23本の櫛歯材を放射状に配置し細い繊維質の紐で結束している。さらに、残存している櫛歯を含め頭部全体に赤漆を丁寧に塗布している。

(4) タテチヨウ遺跡(図一12・13) 弥生時代前期から中期にかけての結歯式の堅櫛が約16点出土している。そのなかで形態的、構造的に特徴のある櫛



第1図 弥生時代の豎櫛と簪・笄 (S=1/3)

表1 弥生時代竪櫛の出土地名表

(文献欄の番号は文末の文献番号に対応する)

	遺跡名	所在地	時期	種類	素材・結束法	彩色など	文献
1	野本遺跡	石川県松任市	中・後半	結歯式	木質・樹皮綴じ		(1)
2	松原遺跡	長野県長野市	中・後半	結歯式	木質・漆塗り	朱漆塗り	(2)
3	朝日遺跡	愛知県名古屋市中	中・前半	結歯式	木質・樹皮綴じ	赤色顔料塗布	(3)
4	納所遺跡	三重県津市	前	結歯式	木質・漆塗り	朱漆塗り	(4)
5	五村遺跡	滋賀県虎姫町	後～末	刻歯式	木質	彩色?	(5)
6	服部遺跡	滋賀県守山市	後	刻歯式	木質	赤色顔料塗布	(6)
7	太田遺跡	京都府亀岡市	前	結歯式	木質・漆塗り	漆塗り	(7)
8	東奈良遺跡	大阪府茨木市	後	刻歯式	木質		
9	安満遺跡	大阪府高槻市	前・後半	結歯式	木質・漆塗り	赤漆塗り?	(8)
10	巨摩遺跡	大阪府高槻市	後	刻歯式	木質	赤色顔料塗布	(9)
11	池島・福万寺遺跡	大阪府東大阪市・八尾市	後	結歯式	木質・漆塗り	赤漆塗り?	(10)
12	東武庫遺跡	兵庫県尼崎市	前	結歯式	木質・漆塗り	朱漆塗り	(11)
13	玉津田中遺跡	兵庫県神戸市	前	結歯式	木質・漆塗り	朱漆塗り	
14	唐古遺跡	奈良県田原本町	前	結歯式	木質・漆塗り	朱漆塗り	(12)
15	平城京左京三条一坊	奈良県奈良市	前	結歯式	木質・漆塗り		(13)
16	タテチョウ遺跡	島根県松江市	前～中	結歯式	木質・漆塗り	朱漆塗り	(14)
17	西川津遺跡	島根県松江市	前～中	結歯式	木質・漆塗り	朱漆塗り	(15)
18	里田原遺跡	長崎県田平町	中	結歯式	木質・漆塗り		(16)

表2 弥生時代簪・笄の出土地名表

(文献欄の番号は文末の文献番号に対応する)

	遺跡名	所在地	時期	種類	素材・結束法	彩色など	文献
1	輿遺跡	京都府福知山市	中	簪	木質?		(17)
2	池上遺跡	大阪府和泉市・泉大津市	中	簪	木質		(18)
3	安満遺跡	大阪府高槻市	前・後半	簪	木質・漆塗り	赤漆塗り	(8)
4	瓜生堂遺跡	大阪府東大阪市	前	簪	鹿角・骨		(19)
5	若江北遺跡	大阪府東大阪市	後	簪	木質		(20)
6	池ノ内遺跡	鳥取県米子市	後	簪	木質		(21)
7	菜畑遺跡	佐賀県唐津市	前	簪	骨		(22)

について整理してみる。

弥生時代の漆製品の科学的調査例が少ないなか、同遺跡出土の櫛について科学的な分析調査が実施された。調査対象の12点の櫛において、使用されている赤色顔料はすべて水銀朱(HgS)と同定された。また4点の漆膜断面の顕微鏡観察から塗膜の組成と材質について観察がなされた。これらの櫛の特徴として、全体として生漆の使用が顕著であることをあげている。こうした調査結果の成果は、国立歴史民俗博物館による櫛の製作工程の復元模型製作に反映され展示などに活用されている。

その他に、弥生時代中期にあたる漆塗りの結歯式として、里田原遺跡から頭部両端に突起を持つ櫛が出土している(図-14)。

## 5. 弥生時代後期の櫛

(1) 東奈良遺跡(図-15) この遺跡から出土した櫛は木質の刻歯式のもので、頭部がイチョウの葉のように扇形に広がる意匠を取り入れており、8本の櫛歯を刻み出している。また、横方向に3条の複合鋸歯文が帯状に刻まれている。この文様構成は、次に述べる五村遺跡出土の櫛とも共通する。

(2) 五村遺跡(図-16) 平成6年度の発掘調査で出土した刻歯式の櫛である。遺物整理の過程で保存処理にさきがけ事前調査を実施したので、その観察所見をもとに造形法を復元しながら整理する。

保存処理前の事前調査として、実体顕微鏡による細部の観察を実施した。また、そのさい櫛歯の付け根付近に赤色顔料らしきものを認め、その部位を中心に蛍光X線分析を実施した。その結果、一部にベンガラが付着しているとの報告がなされた(信里・林1997)。

一般に機器分析により鉄を検出したからといって、ベンガラなど酸化鉄系の赤色顔料を積極的に使用したとするには早計で、鉄を含む鉱物などは埋蔵環境中に普遍的に存在していることからその調査結果の取り扱いには注意が必要である。本件では、実体顕微鏡による観察結果をふくめ、櫛の付け根付近と、顔料らしきものが認められない木地部分との分析結果との比較において赤色顔料の可能性もある、という内容を調査担当者に報告したいきさつがあったこ

とを付記しておく。

一方、実体顕微鏡による細部の観察は、次に述べる製作技法の復元のさいに非常に役立った。調査報告者らも記述しているように、弥生時代の特徴的な文様が櫛頭部の意匠に取り入れられている。まず、櫛の製作にあたり木質の緻密な材料を板材として用意し、櫛の外形を切り出す。次に櫛歯の間隔を5~6mm間隔とするため櫛歯の付け根に当たる部分に直径1mm以下の小孔を穿ける。この小孔は櫛歯を刻む時の間隔の目安とするとともに、櫛を使用するさい歯が頭部に向かって裂けるのを防ぐ役割も果たしていると考えられる。

前述した小孔を目安とし櫛歯を刻み、次に頭部の装飾に入る。頭部中央にあたるとみられる三角形の透かしは櫛全体の意匠にとって重要である。頭部には5条の複合面鋸歯文が横断している。この文様帯の加工法は、まず鋭利な刀子を使い幅1~2mm間隔で罫引き線を入れる。この罫引き線の両側から内に向かって1cm当たり7個の三角形を構成するように切れ目を入れ、なかの三角形を取り除くことで緻密な鋸歯文を完成させている。

(3) 服部遺跡(図-17) 刻歯式の木製櫛で、櫛頭部には透かし彫りと線刻が施され、全体に赤色顔料が塗布されている。櫛歯はほとんど欠失しているが当初5本であったと復元できる。櫛片面の中央には渦巻文があり注目される。この文様は、銅鐸などにみられる弥生時代を象徴する連続渦巻文の一単位に類似している。こうした渦巻き文が木製品に表されたものとして、大阪府雁屋遺跡出土の木製四脚容器の蓋がある。

(4) 巨摩遺跡(図-18) 同遺跡出土の刻歯式櫛はカヤ材で、装飾性は少ないものの頭部と櫛歯の付け根付近に赤色顔料が塗布されている。

## 6. 簪こうがいと笄

簪は、「髮刺」が音韻変化した言葉で飾り櫛とともに頭髪に挿す装飾品である。また、笄は髪を搔き上げたりする細長い道具で、簪と同様に結び上げた髪を飾る場合もある。これらの素材は、木や骨、角、貝や鼈甲べっこうなどで、時代が下ると銅や銀などの金属製のものが登場する。

弥生時代の簪や笄の出土例は10点以上に達していると考えられるが、木器や骨角器で、先端が尖った棒状品をどの程度簪や笄として扱うかは難しいのが現状である。通常、頭部などに何らかの装飾が付加されているならば、髪飾りとして報告されるのが実状であろう。本稿では7遺跡9点の簪ないし笄の出土地名表を提示し図示するにとどめる。

### 7. 弥生時代から古墳時代の竪櫛へ

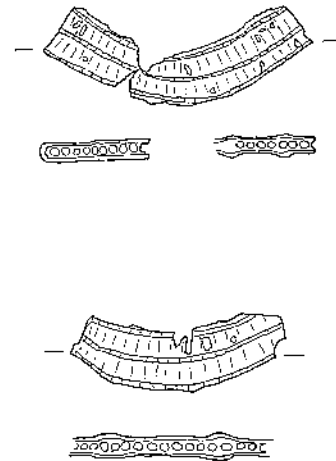
鮮やかな彩りが添えられた弥生時代の櫛から、古墳時代へはいり黒一色の櫛へと大きく変化していった。西日本における古墳時代の竪櫛の出土例をあげるならば、報告されているだけで1000点近い数量にのぼる(奈文研1991年)。その製作技法についてはいくつかのパターンがあるが、基本的には同一の手法によるものが大多数をしめる。そうしたなかで、とくに雪野山古墳からは一般的な黒漆塗りの彎曲結歯式竪櫛とは異なるタイプのものが出土していることは注目に値する。

この雪野山古墳からは、石室内棺外北側から竪櫛が20数点出土するとともに、竪櫛の容器と想定される黒漆塗り合子が検出され注目された。発掘調査当時、石室内の粘土床と石壁との狭い空間に漆膜として遺存しており、筆者がその取り上げ保存に協力するとともに漆膜の分析調査を実施している。竪櫛を精査する過程で、この時代に一般的な彎曲結歯以外にいわゆる単純結歯式ではないかとする竪櫛が4点報告された(福永・杉井1996)。

櫛の遺存状態が悪いため、櫛の頭頂部での処理方法が不明であるが、櫛の断面形状が通常は長方形であるのに対し、本例は丸形であり、さらに櫛付け根の結束部に渡された2条ないし3条の横架材が弧状に結束されていることから、一般的な竪櫛とは構造的に異なる櫛であると考えられる。今のところ類例はないようであるが、弥生時代の単純結歯式竪櫛の造形技法の伝統を受け継ぐ遺例である可能性が高い。

#### まとめ

弥生時代の前期にみる櫛の造形技法は、漆を使用した結歯式竪櫛が主流であることは従来から述べら



第2図 雪野山古墳出土の竪櫛(実寸)  
〔「雪野山古墳の研究」1996年より〕

れていた。縄文時代の伝統を直接受け継いだものであるかどうかは、今後の類例の増加と材質調査にかかっている。

弥生時代中期には、結歯式ながら樹皮で綴じる例が中部地域で報告されているが、一般的に漆を使用しない木質遺物は遺存しにくく、当時はこの技法による竪櫛が一般的であった可能性も認識すべきであろう。またこの時期に、中部や山陰地方において漆を高度に利用した結歯式竪櫛が残っていることも、漆工技術史のうえからも重要である。

弥生時代後期になると木質を素材とした刻歯式の竪櫛のみとなり、この時代特有の文様である鋸歯文や渦巻き文などが彫刻されるとともに、なかには赤彩され頭髪を飾るにふさわしい装身具として展開していく。

本稿では弥生時代の飾り櫛の類例が乏しいなか、各遺跡出土の調査例を造形法の観点から整理してきた。今後、弥生の集落遺跡などからの出土例の増加を期待するとともに、調査研究の主体となる素材の材質調査と造形技法の調査も平行して実施していく必要がある。

#### 参考文献

- (1) 石川県埋蔵文化財センター編『野本遺跡』石川県埋蔵文化財センター 1993年)

- (2) 〔長野県埋蔵文化財センター編「松原遺跡」(『長野県埋蔵文化財センター年報7』)〔長野県埋蔵文化財センター 1990年〕
- (3) 愛知県埋蔵文化財センター編「朝日遺跡Ⅲ」(『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書32集』愛知県埋蔵文化財センター 1992年)
- (4) 三重県教育委員会編「納所遺跡—遺構と遺物—」(『三重県埋蔵文化財調査報告35-1』三重県教育委員会 1980年)
- (5) 奈良大学文学部考古学研究室編「五村遺跡出土の竪櫛について」(『五村遺跡』虎姫町教育委員会・奈良大学文学部考古学研究室 1997年)
- (6) 滋賀県教育委員会他編「〔服部遺跡発掘調査概報〕滋賀県教育委員会・守山市教育委員会・滋賀県文化財保護協会 1979年)
- (7) 〔東京都埋蔵文化財調査研究センター編「太田遺跡」(『東京都埋蔵文化財調査報告書第6冊』)〔東京都埋蔵文化財調査研究センター 1986年〕
- (8) 大阪府教育委員会編「〔高槻市安滴弥生遺跡発掘調査概要〕大阪府教育委員会 1970年)
- (9) 大阪府教育委員会編「〔巨摩・瓜生堂—図版編—〕大阪府教育委員会・〔大阪文化財センター 1970年〕
- (10) 〔大阪文化財センター編「〔池島・福万寺遺跡発掘調査概要X』)〔大阪文化財センター 1995年〕
- (11) 兵庫県教育委員会編「〔東武庫遺跡現地説明会資料』兵庫県教育委員会 1993年)
- (12) 末永雅雄・小林行雄・藤岡謙二郎「木器類及び植物製品」(『大和唐古弥生式遺跡の研究』京都帝国大学文学部考古学研究報告 第16冊 1943年)
- (13) 奈良市教育委員会編「平城京左京三条一坊十坪の調査第219次の調査」(『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書平成2年度』奈良市教育委員会 1991年)
- (14) 島根県教育委員会編「〔タテチョウ遺跡Ⅲ』島根県土木部河川課・島根県教育委員会 1990年)
- (15) 島根県教育委員会編「〔西川津遺跡発掘調査報告書V』島根県土木部河川課・島根県教育委員会 1989年)
- (16) 「里田原遺跡略報Ⅱ」(『長崎県文化財調査報告書第18集』長崎県教育委員会 1974年)
- (17) 〔東京都埋蔵文化財調査研究センター編「福知山市興遺跡出土の簪について—弥生時代簪の一事例—」(『東京都埋蔵文化財情報第33号』)〔東京都埋蔵文化財調査研究センター 1989年〕
- (18) 〔大阪文化財センター編「〔池上遺跡—木器編—』)〔大阪文化財センター 1978年〕
- (19) 大阪府教育委員会編「〔東大阪市瓜生堂の調査』大阪府教育委員会 (1967年)
- (20) 大阪府教育委員会編「〔巨摩若江北遺跡(その2)』大阪府教育委員会・〔大阪文化財センター 1984年〕

- (21) 加茂川改良工事関係埋蔵文化財発掘調査団編「〔池ノ内遺跡』米子市教育委員会・鳥取県河川課 1986年)
- (22) 「菜畑遺跡」(『唐津市文化財調査報告書第5集』1982年)

## 引用文献

- 小林行雄「古代の技術」塙書房 1962年)
- 亀田博「竪櫛」(『末永先生米壽記念論文集』末永先生米壽記念会 1985年)
- 工楽善通「漆工技術」(『弥生文化の研究第6巻』雄山閣 1986年)
- 木下尚子「櫛と簪」(『弥生文化の研究第8巻』雄山閣 1987年)
- 工楽善通「わが国での漆使用の起源とその展開」(『漆工史第10号』漆工史学会 1987年)
- 永嶋正春「タテチョウ遺跡出土の赤色漆塗櫛に見られる漆技術について」(『タテチョウ遺跡発掘調査報告書Ⅲ』島根県土木部河川課・島根県教育委員会 1990年)
- 奈良国立文化財研究所編「〔漆製品出土遺跡地名表Ⅱ—西日本編—』奈良国立文化財研究所 1991年)
- 奈良国立文化財研究所編「木器集成図録近畿原始篇」(『奈良国立文化財研究所史料第36冊』奈良国立文化財研究所 1993年)
- 本間元樹「弥生時代の櫛」(『第28回大阪府下埋蔵文化財研究会資料』)〔大阪文化財センター・大阪府教育委員会 1993年〕
- 木立雅朗「木製櫛の変遷とその意義について」(『野本遺跡』石川県埋蔵文化財センター 1993年)
- 中川正人「櫛の造形—縄文時代の竪櫛—」(『紀要第11号』)〔滋賀県文化財保護協会 1998年〕
- 岩永省三「弥生時代の装身具」(『日本の美術3 No370』至文堂 1997年)
- 信里芳紀・林大智「五村遺跡出土の竪櫛について」(『五村遺跡』虎姫町教育委員会・奈良大学文学部考古学研究室 1997年)
- 福永伸哉・杉井健編「第4章出土遺物」(『雪野山古墳の研究』八日市市教育委員会 1996年)

## 展覧会図録等

- 「漆文化—縄文・弥生時代—」(国立歴史民俗博物館 1994年)
- 「日本の櫛—別れの御髪によせて—」(斎宮歴史博物館 1995年)
- 「卑弥呼の宝石箱」(大阪府立弥生文化博物館 1998年)
- 「木と人—出土木製品にみる人の知恵—」(大阪市立博物館 1998年)



## 編集後記

今回は、縄文時代から中世までの論考、および歴史学そのものに関する問いかけを掲載しました。——時は世紀末、新たな一世紀を我々はもうすぐ迎えようとしています。未来と現在を真剣に考え、そのために過去のデータを蓄積していく。それが文化財保護・考古学に携わる我々の責務の一つだと思われます。本号がその一助になるのを願ってやみません。(S)

平成11年3月

### 紀要 第12号

編集・発行 財団法人 滋賀県文化財保護協会  
大津市瀬田南大苅町1732-2  
Tel(077)548-9780・9781

印刷・製本 富士出版印刷株式会社  
大津市札の辻4-20  
Tel(077)523-2580 Fax(077)524-6668